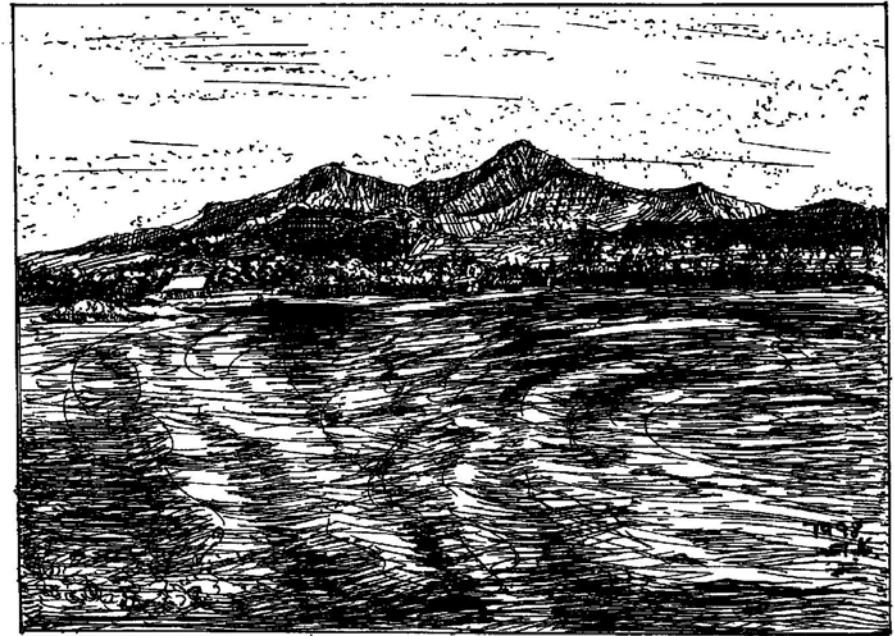


原子村

1999年
1998年
秋・冬合併号



Mt. Bandai, 1998 T. Kondo

編集後記

一九九八年は、キュリー夫人によるラジウム発見から丁度百年に当たり、日本では夫人の孫に当る女性が来日して、座談会などで語るイベントもあった。小誌も、放射線に係わる投稿を募集した結果それぞれ特色ある力作で頁を飾ることが出来た。

これらの特集記事に国または時期が偶然にも重なって、フランス文化物語り（椿姫について）と、太平洋戦争末期の少年兵たちの行動（少年たちのストライキ）の記録文が並んだ。

これらに加えて、北電の近藤氏の「思い出の我が原子力時代」は、他のメディアでは隠れてしまう部分のすぐれた記録になっている。また黒井氏の『組織と個人』の関係について考察した論文は力作であり今日的な問題点を提起している。

発行が遅れた云い訳めいたが、銘々が現代の証言になっていると云えよう。

引き続き御投稿と御愛読を乞い願う次第です。

趣旨

戦後スタートした原子力開発は、今や社会に定着した技術に成熟したと言えよう。我国の生存と市民の繁栄に必須なエネルギーの確保という戦後の悲願であった事業に縁あって係わった我々であるが、集団としての達成度には誇りと満足を感じている。しかしながら、集団の中に埋没した銘々の生活の何と多くがかげがえないものであったことか。

これらを後世に伝えることは、来たるべき日本の次なる事業（それが、何にせよ）によって貴重な意味を持つことになり得ると信じて、我々はここに相集う者である。

執筆要領

- ① 題 目：自由
- ② 長 さ：6000字まで
- ③ イラスト、写真：可（但し、白黒で図案の簡単なもの）
- ④ 型 式：随筆、評論、解説、紀行文、趣味、意見など。和歌、俳句も可。
- ⑤ 内 容：自分のこと、グループのことなど。但し、どこか少しは仕事または社会、文化に関係あるのが望ましい。課題に沿って書き、書くことが沢山ある人は、何度でも書いて下さい。
- ⑥ 著 名：出来たら本名が良い。
- ⑦ 年齢、経験：不問
自分史をつくりつつある若手も歓迎
- ⑧ 締切り：毎月月末
- ⑨ 原稿送り先
〒310-0903 水戸市堀町1135-26
『原子村』編集人 代表 下桶敬則

電話連絡

029(254)1015

原子村 秋・冬合併号（通巻二十六号）

発行 一九九九年二月一日

編集人 下桶敬則

印刷人 松崎孝夫

印刷所 茨城県那珂郡東海村舟石川大山台五七三の四三

（株）原子力資料サービス

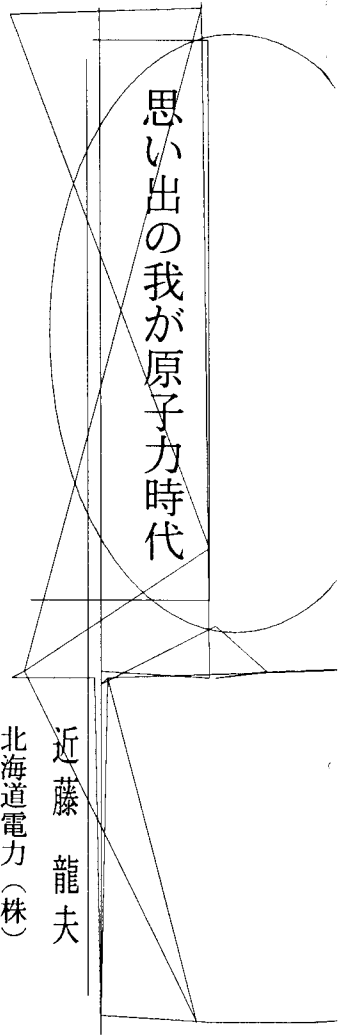
定 価 三〇〇円（税込み）

第26号

平成11年2月1日発行
1991年10月1日創刊

目 次

思い出の我が原子力時代	近藤 龍夫	1
「個」の確立なき我が国近代以降の悲劇	黒井 英雄	10
椿姫について	菊地 輝男	23
空をめざした少年たちのストライキ	福田 保昌	38
私と放射線の出会い	葉佐井博巳	50
放射線 —— 実態、規制、感覚	伊藤 直次	57 (19)
60才過ぎてM. Curie 伝を読む	赤石 準	73 (7)
放射線利用試験研究データベース	川上和市郎	75 (5)
表紙のことは	近藤 達男	76 (4)
東京地区同人会	編 集 部	77 (3)
読者からの手紙と消息	編 集 部	79 (1)



近藤 龍夫
北海道電力(株)

我が原子力の第一歩

昭和四六年、火力部門から原子力部門へ異動、さっそく上司からグラストンエドランドの「原子炉理論」を渡され、「これを勉強し、原研の研究を経て、原子炉主任技術者の資格を取りなさい、取らないと困ることになります」と脅され、東海村の原子力研究所に遊学した。純真な私は、あの思い出深い研究所の「真砂寮」の三畳間で私史上まれな猛勉強、その甲斐あって資格を得

た。振り返れば、あの教科書「原子炉理論」の「あなたに理解して頂きたいのです」と語りかけてくるような、そんな教科書に初めて出会い感動した。原研では杉先生の名講義、その魔力で中性子の世界に吸い込まれたものです。先生とは今日まで長くお付き合いさせて頂いている。

日本原電への出向

昭和四七年敦賀発電所へ出向、浜崎課長、栗原副長、篠田主任(原研の研究者が何故ここに

60才過ぎて M. Curie 伝を読む

赤石 準

まえがき:「キュリー夫人伝」との出会い

私は若いときに人物伝を読んだことがない。小学生のときに「野口英世」を読み、こんな大人物は私とは全く別世界の人と思って以来、本紙読者が中学生のときに読んだことと思う「キュリー夫人伝」も読まなかった。それが60才を幾つか過ぎて読むことになったのは、ある方から“Ra の発見者は誰か、本により M. Curie と書いてあったり Curie 夫妻とあったりしてどちらが正しいか判らない”と聞かれたのがきっかけである。Po は Curie 夫妻, Ra は夫妻と G. Bémont によって発見^{*1}が報告されているが, Bémont が発見報告に名を連ねていることは原研入所まで知らなかった。昭和30年代半ばに東海研図書館が完成し、たまたま目にした Gmelin (Gmelins Handbuch der Anorganischen Chemie) で Bémont を知った。Bémont が分析化学関係の人であることは想像できたが、どのような人物か, Curie 夫妻の Po 発見にどのような寄与をしたか, また Ra 発見者の一人としてなぜほとんど知られていないのかについては調べることができず、定年退職後に Ra 発見者について尋ねられたのを機会に調べてみた^{*2}。この手始めとして初めて白水社刊の「キュリー夫人伝」(以下 Ève Curie 著「Madame Curie」を「夫人伝」と書く)を手にしたわけである。「夫人伝」を読んで第一に感じたことは、夫人は探求心の強い努力家であり、T. Edison の云う「天才とは99%の perspiration(汗)と1%の inspiration(天来の着想力)の賜物である」の言葉通りの人であることであった。

^{*1} 「物事の発見者」とはいろいろと定義できるが、ここでは「最初の公表者」という考えをとる。

^{*2} G. Bémont については拙著「G. Bémont, Ra の発見において忘れられた化学者」Isotope News(日本アイソトープ協会)1998年1月号p22~25, 2月号p28~31, 3月号p26~30を参照されたい。

感動したことはさておき、当時の科学的背景、具体的にどのようにしたのか、場合によっては原文や英訳本^{*3}はどのような語句となっているのかなど、更に知りたいことも多い。「夫人伝」はあくまでも人物伝で、著者である夫人の次女 Ève Curie は音楽家であり、上記のようなことは「夫人伝」を読むだけでは知り得ないのは当然である。私には十分には調べきれないが、当時の放射能に関する論文;主に科学アカデミー報告(Comptes Rendus: コントランジュ)など;に発表された夫人の論文, 他者の著になるキュリー夫人伝^{*4}などを読みあさった結果の2, 3を「夫人伝」に合わせて述べてみたい。

1. 1902年, 夫人が報告した Ra の原子量について

「夫人伝」に「夫人は1902年に Ra の原子量を225と報告した」とあるのを読んだとき、---これは Ève の書き間違いだ、ウラン鉱石中に極めて微量にしか存在しない Ra について1902年という時期にこんな正確な値が得られる筈がない、後年報告された値を1902年の報告と書いたのではないか---と思ったが、Gmelin (Ra 巻:1928年)の Ra の原子量欄には「Marie Curie (C. r. 135 [1902] 161 findet an RaCl₂ 225±1)」と記載されており、書き間違いと思ったのは私の下種の勘ぐりであった。

^{*3} 最初の英訳本は1937年, Vincent Sheean の訳で Doubleday & Co. (New York) から出版された「Madame Curie」である。

現在も初版の複製版として版を重ねている。

^{*4} ① E. Doorly 「The Radium Woman」W. Heinemann Ltd. (英) (1938年初版); 研究社刊(1959年)156pp(青少年向き)

② R. Reid 「Marie Curie」The Quality Book Club & The Scientific Book Club (英) (1974年初版)349pp

③ S. Quinn 「Marie Curie, A Life」W. Heinemann Ltd. (英) (1996年初版)509pp(各国で刊行された夫人伝, 学術誌に掲載された M. Curie の記事まで幅広く取上げられている好著)

④ J. H. Senior 「Marie & Pierre Curie」Sutton Pub. (英) (1998年初版)117pp(青少年向き)

Ra の発見については Po の場合のほどではないが、新元素であることに疑問が持たれ、夫人が Ra の原子量測定と単離に努力がそそがれたことが「夫人伝」には強調されている*⁵。

Ra が金属として単離されたのは1910年(Mme P. Curie と A. Debierne による)であって、単離の8年前にどのような方法でこのような正確な値が測定できたのか、用いた鉱石量、分離した Ra 塩の純度、当時は重量法の筈だが用いた天秤の感度、最初に得られた原子量の値、もし原子量計算に用いた他の元素の原子量に現在の値を採用したら Ra の原子量は一体どのような値になるのか ---- など、報告された原子量だけでも次から次と知りたい事柄がでてしまう。

「夫人伝」とは少し離れるが、夫人の報告を調べると下記の 2 のようである。

2. 夫人による Ra 原子量測定値

原子量に関する夫人の最初の報告は1899年*⁶、次いで1900年*⁷で、これらは Ra 自体の原子量ではなく鉱石から分離した Ra を多く含む Ba の原子量を測定したものである。1899年の報告では、オーストリアから寄贈された U 尾鉱1t のうち半分を処理して Ra を含む2kgの BaCl₂ を得、分別結晶で精製した約0.5gの Ba(Ra)Cl₂ に AgNO₃ を加えて生成させた AgCl の重量測定により、Ba 成分の放射能の増大とともに塩化物の見かけの原子量が大きくなることを示した。放射能が金属 U の3000倍、4700倍、7500倍の Ba(Ra)の原子量として140.0, 140.9, 145.8を得た。1900年の論文は1899年の報告の続報であって、更に精製した塩化物の Ba について見かけの原子量として171.1, 173.6

*⁵ Ra に限らず、新元素発見においては共通のことである。

*⁶ M^me Sklodowska Curie, Sur le poids atomique du métal dans le chlorure de baryum radifère, Compt. Rend., 129, 760-762(1899)

*⁷ M^me Curie, Sur le poids atomique du baryum radifère, ibid., 131, 382-384(1900)

を得、この結果、Ra の原子量は174以上であるとしている*⁸。

1902年の報告が夫人の Ra 原子量についての最初の報告で有名なものである*⁹。著名な論文のために簡単な紹介に止めるが、更に精製した90mgの RaCl₂ について一連の測定を行った。第一の試料については原子量220.7, 223.0, 223.1を得たが、スペクトル分析の専門家である M. Demarçay に純度測定をして貰った結果、微量の Ba の混入が認められた*¹⁰。それで第二の測定として新手法 …… 多分、分別結晶の際にアルコールを併用する方法と思われるが、本報告には記載がない …… を取り入れて精製し、Demarçay によって Ra 原子量測定に問題となるような量の Ba の混入がないことが確認された高純度の RaCl₂ について測定した。この結果、Ra の原子量として225.3, 225.8, 224.0を得、平均値の225をとり、誤差は±1を超えないことを報告した*¹¹。この報告では「Ra の化学的性質から周期表では U, Th と同欄(同周期)に入る2価のアルカリ土類元素であり、Ba の上*¹²に位置する元素」としている。

この報告で、夫人は一流化学者としての地位を獲得した。

⁸ 「夫人は Ra の原子量を最初は140、次いで174と報告した…」と書いている論文[例: Proc. Roy. Soc. A., 86, 270(1911)]もあるが、脚注^{6, 7}のタイトルに見られるように Ra の原子量とは云っていない。

*⁹ M^me Curie, Sur poids atomique du radium, Compt. Rend., 135, 161-163(1902): 7月21日の科学アカデミー例会で発表。

*¹⁰ M. Curie の紹介記事でしばしば目にする原子量223.3と書かれた夫人の実験ノートは、この測定の前4月12日のものである。このページのオートラジオグラフには強い汚染が見られる(パリ Musée Curie に展示されている)。

*¹¹ アカデミーでの発表は夫人自身ではなく、1899年、1900年の論文は H. Becquerel, 1902年の論文は M. Mascart による。

*¹² 当時は周期表の上下は現在と逆に云っていたので、「Ba の上に位置する」ということは間違いではない。

RaCl₂ と AgCl の重量測定に用いた天秤についてはあまり詳しくは述べられてはいないが感度は 1/20mg であり, 4桁の測定値が得られるものであった。ノーベル物理学賞の賞金を研究に注ぎ込むまでは研究費用にこと欠いたことは「夫人伝」で強い印象を受けるところであるが, このような高性能の天秤を持つことは難しいことと思う。天秤の歴史を調べても知り得なかったが, 当時はやはり大変に高価なもので夫人が持てるようなものではなく, Pierre 所有の器具の一つであったとのことであり^{*13}, 実物は Musée Curie 近くの Institut Curie にある。

Ra 原子量計算に用いた Cl, Ag の原子量の値は1902年のことであるから, H=1とした値で, それぞれ35.4と107.8であった。現在の値で夫人の結果を再計算すると Ra の原子量は225.8となる。夫人の得た値はまさに驚異的な正確さである。

夫人の発表以降, Ra 原子量の測定は他の化学者によっても行われたが夫人も継続して測定しており, 評論誌の Le Radium に今までの経過を含めた発表がされている^{*14}。この論文では原子量として226.2が報告されているが, H=1でなく, 0=16とした Landolt の新原子量, Cl と Ag の原子量に35.45および107.93を用いると Ra の原子量は226.45となることを報告している。また, 試料 RaCl₂ の重量:0.4052g, 0.39335g などの数値, スペクトル・ラインの図なども記述されている。また, ドイツ語が達者であった夫人は Frau Curie の発表名で独の Jahrb. Radioaktivität Elektronik(1909年)にも再度 Ra 原子量について review を書いている。

なお, 国際純正・応用化学連合(IUPAC)の Ra の原子量は「Ra の原子量は試料により大きく異なることがある」との注釈付きで²²⁶Ra の原子量に226.0254の値が与えられていたが, 1983年以

*13 Mme. Monique Bordryによる(1998年12月:於パリ)

*14 M^{me} Curie, Sur poids atomique du Radium, Le Radium, 4^e Année, N° 10, 349~352(1907); 本論文の簡潔なものは Compt. Rend., 145, 422~425(1907)

降は単に²²⁶Ra の質量数の226が与えられるだけになった。

3. 「夫人伝」の原本初版と英訳本の刊行年

仏 Gallimard 社の初版刊行は1938年である。これに対して V. Sheean 訳の Doubleday 社の初版は1937年刊行である。

1938年, 1937年といっても前者が年初め, 後者が年末とすると単に印刷・刊行の僅かな差が刊行年の差となることがある。大作では, 特に「夫人伝」のように手紙を多く掲載するとなると原稿着手から完成までにかかりの時間がかかる筈であるが「夫人伝」を初め, 他者の執筆になる M. Curie 伝にも Ève の原稿着手・完成の時期についての記述がない。脚注^{*4}③にあげた Quinn の「Madame Curie, A Life」の序文には「In 1937, her younger daughter Eve Curie published one of the most popular biographies of all time, *Madame Curie*。」とあり, また著者の Quinn が1988年に Ève に面会して“どうしてあのように早く「夫人伝」を出版したのか”と尋ねている。これに対する Ève の答えは“誰かに先を越されないうちに”であった。Ève が「夫人伝」を書いたのは1937年であるが, 我々が接する Gallimard 社の初版は1938年で, 英訳本の前にどこかで出版されていたのか, 上記のように単に年末・年始の刊行だったものか, あるいは他の理由によるものか英訳本を入手した時から不思議に思っていた。このことについては「夫人伝」の刊行を調べている(前)電総研の木村美和子氏から, Ève の「夫人伝」が1937年秋から約半年間仏の週刊誌「Marianne」に掲載されていることの情報^{が寄せられた}。また, 同氏が Gallimard 社に問い合わせた「夫人伝」刊行についての同社からの返答文(仏語)を資料として頂いた^{*15}。この返答文には, 同社が Ève と「Madame Curie」の出版契約を結んだのは「夫人伝」が同社により出版された3年前であること, およびこの契約には Marianne 誌が review することと掲載, および米の雑誌への前もっての掲載を Ève が与えていることの記述があり, 何か複雑な事情があるようである。

*15 木村美和子, 私信(1998年9~12月)。

私は「Marianne」誌の全文は手にしていないが、印刷ページ総数からして全体の長さは Gallimard 社刊のもの約1/2である。第1章「Marnia」について Marianne 誌、Gallimard 社本、Sheean の英訳本を比較したところ、Gallimard社本の文章は「Marianne」誌と同じであるが、一部の語句の変更があるほか、かなりの文章が Gallimard 本には追加されている。しかし、Gallimard 社本より前に刊行された英訳本の文章は第1章の「Marnia」については Gallimard 社本と同じであった。パリの Musée Curie での見聞では、Doubleday社の編集者が当時健康を少し害してスイスにいた Ève に英訳本の早期刊行を要請したとのことであった^{*13}。当時の詳しい経緯については Mme. Bordry が、1930年代末以降米に滞在したままの Ève Curie に問い合わせるのととのことであるが、Mme. Ève が老令(1904年生まれ)のために返事を貰えることは難しいと思う。Gallimard 社本、英訳本とも刊行月が判らなかつたことは残念であったが、英訳本と原本の刊行が単に年末、年始ということではなかつた^{*13}。

Doubleday 社の刊行本は販売が米国内に限定されたようで、同じ Sheean の訳本が英では W. Heinemann 社により1938年に刊行されている。米での英訳本刊行以前に「Marianne」誌の他には Ève の「Madame Curie」の掲載は見当たらないようである^{*13}。

なお、週刊誌「Marianne」はどのような性格の雑誌であるかについては、Ra 発見100周年記念行事に招かれて来日した夫人の孫にあたる核物理学者の Mme. H. L. Curie に尋ねたところ、女性向きの教養雑誌であるとのことであった^{*16}。

4. 夫人の論文発表名

脚注などに夫人の論文の幾つかを記載したので気がつかれたと思うが夫人の発表名は Mme Sklodowska Curie, Mme P. Curie, Mme Curie となっている。「夫人伝」第15章には Ra 発見して数年内に夫人や Pierre が単独、夫妻の連名、あるいは他者との連名で32篇の論文を発表したこと、このうち13篇について著者

^{*16}Mme. Hélène Langevin Curie による(1998年10月、於:東京)

名・報文名が書かれている。この中には発表名が Marie Curie と書かれてものが6篇ある。これらは1899年～1904年の発表論文であって入手が難しいが、私が手にできた3篇には Marie という発表名のものはない。夫人の初期には Sklodowska(あるいは単に S.)の名が、中後期には Mme Pierre Curie, Mme Curie という発表名が多いが、脚注^{*6・7}にあげたように続報でも発表名が異なるものがある。Marie Curie の名で発表された論文は、数多い夫人の論文の中でほんの僅かである。

通常発表名は生涯を通して変えないのが普通であるが、夫人の場合には当てはまらない。どのような理由で発表名が異なるのか、また調べるに値するか否かの問題もある(科学的には意味は無い:夫人の社会的背景を知るためには意味があろう)。発表名は尊重されるべきものであるが困ることもなる。論文で発表者名を引用する場合には敬称を書かず、名(first name)は頭文字、姓はフルスペルにすることが通常である。しかし、夫人の場合に発表名を尊重して、例えば Mme S. Curie, Mme Pierre Curie, Mme Curieの発表名を通常通り、S. Curie, P. Curie, 単に Curie などと書くと夫人の論文か否か混乱する。特に Mme Pierre Curie の発表名のものは Pierre Curie に間違えられる(^{*17}参照)。このため学術誌でも夫人の発表名がどのようなものであれ、全て M. Curie とされるのが普通である。これは発表名の尊重よりも混乱を防ぐためであって、2の原子量の項の始めに書いたように夫人の Ra 原子量の論文(1902年)が Gmelin に Marie Curie と書かれているのもこの一例である。しかし最近の Gmelin(1980年頃以降)では発表名を尊重している。なお、夫人の学位論文は Mme Sklodowska Curie であり、ノーベル物理学賞の証書には PIERRE CURIE の下に FRU MARIE CURIE と書かれている(Fru は Madame の意味)。

化学者の誰しもが見る Chemical Abstracts(C.A.)では、本文(アブストラクト)では発表名通りに記載されているが巻末の著者索引では全て M. Curie とされている^{*17}[注記は次ページ]。

夫人の発表名が変わったのは, Sklodowska の名が, 特に仏では読み難いためもあるが, Pierre の没後にマスコミによって大きに報道された1911年の「Langevin 事件」; あの意味の強い夫人に自殺することまで頭に浮かべさせ, 幼い2人の娘を夫人から引き裂き, 当の P. Langevin は悪し様に書きまくった級友の新聞編集者に決闘状を突きつけた^{*18}; の影も理由の一つではないかと思う。何よりも Ra についての研究を優先し, 幼い Irène に「私よりも Ra の方が大切なの?」^{*18}とまで嘆かせる態度を続けた夫人が第1次大戦中に自分の研究を中断して, 自作のX線診断装置を積んだトラックでまだ若い Irène を伴って戦場を飛び廻ったことも, 私には発表名とともにポーランド出身の夫人の置かれた社会的背景によるとしか考えられない。「夫人伝」には「Langevin 事件」については記述が無いが, 脚注^{*4}にあげた R. Reid や S. Quinn の Marie Curie 伝, および長女の伝記^{*18}にはかなりの記述がある。夫人はポーランド姓: Sklodowska を用いたかったようであるが^{*13, 19}, 夫人の置かれた社会的背景については少々の調べでは私の手が及ばないため, 夫人の発表名が論文により異なっていることの記述に止める。

5. 1998年12月, Ra 発見の実験室跡

Ra 発見の丁度100周年にあたる12月, 所要で英に行った帰途, 1日しか取れなかったが, パリの Musée Curie の Mme. M. Bordry を Musée に訪れた。尋ねたい事項はあらかじめ手紙でお願い^{*17}まれであるが, Mme Pierre Curie を単に P. Curie と誤記されていることもある。[例: Mme Pierre Curie 著の「Traité de Radioactivité(1910)」は, C.A. では本文, 索引とも P. Curie 著とされている: Vol. 5, p1232(1911)]。

^{*18}N. Loriot 著「Irène Joliot-Curie」Press de la Renaissance(1991); 邦訳, 共同通信社(1994)

^{*19}1912年, まだ幼い Irène に対して「手紙を書く時は宛名を Mme Sklodowska とするよう頼んでいる^{*18}。Irène はこれを実行した^{*13}。

しておき Mme. Bordry に面談して情報を得てから, Musée Curie にほど近い, 「夫人伝」にしばしば登場する夫妻の最初の実験室跡に立ち寄った。夫人が大量のピッチブレンド鉱を一人でコツコツと叩き割り, 硝酸に溶解して最後には Po, Ra 発見までの仕事をした例のオンボロ倉庫を改造した実験室の跡である。

Vauquelin 通りにある校門に「パリ市高等工業物理化学学校」という銘板とともに「1898年, ピエールおよびマリー キュリーは本校においてグスタフ ベモンの援助によって Ra を発見した」との銘板^{*20}が掛かっている校門をくぐる。レンガ造りの建物の半地下室を囲む鉄柵のかたわらに「キュリー夫妻が Ra を発見した実験室跡」と書かれた小さい記念碑がある。1995年, 夫妻の結婚の100周年目に夫妻の功績をたたえての500フラン札が発行されたくらいだから, Ra 発見報告の丁度100周年にあたる12月は跡地には何か記念の標示があるかと期待していた。しかし何も無く, 建物が改装中ということもあって廃棄物満杯の大きいコンテナが置かれており, 学生のものと思われるバイクや自転車が無造作に乗り捨てられていた。放射化学発祥 100周年目の記念すべき地であるのに --- と, もの悲しい気分で小雪のチラチラ舞う放射化学の聖地をあとにした。

あとがき

私が購入した白水社の「夫人伝」には, 「確認したい」「関連事項を調べたい」「夫人伝の原文を見たい」「夫人の論文そのものを見たい」とかの色とりどりの付せんが数十枚付いてしまった。今迄に調べた事項のうち, Ra 原子量, 「夫人伝」の刊行年, 夫人の発表名などについて述べた。「夫人伝」に Ra 発見報告者の一人の G. Bémont がどのように記述されているかをみるために, 職場の時間の合間に「夫人伝」を読んでいたので本誌編集者見付けられ, “こういうものは若いときに読むものじゃないの”と云われてから3年も経った。その時は“年を取ってから読むおくて

^{*20}この銘板に書かれていることの検討については^{*2}にあげた

Isotope News の拙著を見られたい。

も世の中には1人,2人いるさ”と返答したが,調べたいこと,調べても判らなかつたことばかりである。大化学者となつても終生「偉い人」にはなり切れなかつた夫人。この夫人の恋愛事件として大スキャンダル化された「Langevin 事件」には,世代を超えたロマンチックな結末があることを一言書いて筆を置きたい。

謝辞

Musée Curie et des Archives de l'Institut du Radium の Mme. Monique Bordry 所長には, Ra 発見100周年の忙しい折にもかかわらず面談して頂き,貴重な資料などをみせて頂くと共に多くの情報を頂いた。在原研那珂研究所 Mme. Bessette Dominique には原本を頂くと共に難解な文章の解釈を教えて頂いた。(前)電子技術総合研究所の木村美和子氏には Gallimard 社刊以前の「夫人伝」についての情報,資料を頂いた。古い文献のほとんどは茨城県立図書館を通して国会図書館などから入手したことなどを述べて,お礼の言葉としたい。

表紙
近藤 達男 (元原研OB)
川上 和市郎 (放振協)
赤石 直準 (放計協)
伊藤 博次 (フランスネット)
葉佐井 昌巳 (広島国際学院)
福田 保昌 (原研OB)
菊地 輝男 (原研OB)
黒井 英雄 (北電苦小牧支店)
近藤 龍夫 (日本原燃)

今季号の執筆者



キュリー夫妻の最初の実験室跡地:写真中央に小さく斜めに写っているものが記念碑(1998年12月2日撮影)
[筆者:(元)日本原子力研究所(保健物理):東海村白方1736-336]